

女子美術大学

「平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信

素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

平成 20 年度活動報告サイト PDF 版

女子美術大学 教育研究事業部

Copyright 2008 JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved

本 PDF ファイルに掲載の画像および文章を無断で複写・複製などの二次利用することを禁じます。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

もくじ

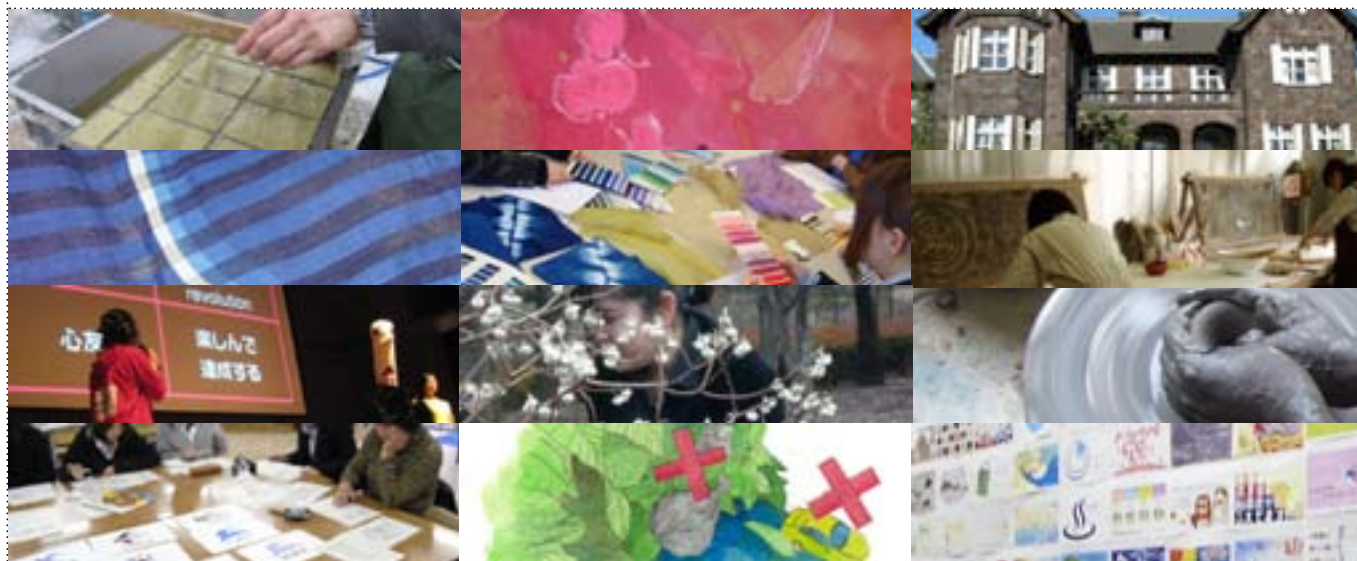
<http://www.joshibi.net/brand>

プログラムについて

はじめに	3	D_ 素材ミュープロジェクト	21
		E_ デザインミュープロジェクト	23
取組の概要	4	F_ 注染プロジェクト	24
取組の目的	5	G_ オーストリッチーズ	27
取組の目標	6	H_ 素材環境教育プロジェクト	29
具体的内容	8	I. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション	31
評価体制など	9	J_ 相武台新磯高校合併 SI プロジェクト	34
実施計画の概要	10	K_ 環境マッププロジェクト	36
実施計画（表 1）	11	L_ 気候変動プロジェクト：環境ポスター制作 ワークショップ	37
「素材と環境教育プログラム」関係一覧（表 2）	12		
「環境・素材プロジェクト」チーム一覧（表 3）	12	§ これまでのプログラム活動報告	39
資料：「学生のプロジェクト活動などの実績」（表 4）	13	1_ 紙プロジェクト（平成 2 年 4 月～）	40
		2_ 絵具（顔料）プロジェクト（平成 2 年 4 月～）	41
§ 平成 20 年度プログラム活動報告	14	3_ バラ・プロジェクト（平成 16 年 4 月～）	42
A_ 紙プロジェクト	15	4_ アンギン・プロジェクト（平成 15 年 4 月～）	43
B_ 絵具（顔料）プロジェクト	17	5_ 日本手拭 B 反プロジェクト（平成 18 年 4 月～）	44
C_ バラ・プロジェクト	20	6_ スリランカの象プロジェクト（平成 19 年 7 月～）	45

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

はじめに

<http://www.joshibi.net/brand>

女子美術大学は、デザインやアートの分野において、地球レベルでの社会文化と環境の様々な問題に対処できる人材養成を目的に、多様な実践型素材・環境教育を行っています。本プログラムは、現在まで本学で行われてきた、特色のある美術造形素材についての教育研究成果や、エココンへの参加などで積み重ねてきた、環境教育の実践を基礎に展開するものです。

環境問題に対する視点をもって、学生は地域性に基いた土・砂・岩・植物などの素材をモデルに自然環境の機能を理解し、各国とのデザイン交流を通して国際感覚を身に付けます。さらに、本プログラムは相模原・町田市域を、地球環境問題に

結びついたアート&デザインの素材と、環境活動のフィールド実習現場として活用し、参加学生は土壌や植物生態系の概念や農（植物）の栽培を大学近隣農場で体験できると共に、NPO 組織や自治体などとの地域連携、国際交流協定校との協働体制も取るシステムです。

このたび文部科学省の行う「平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」に申請した本取組が採択されました。本書は平成 20 年度教育 GP 採択事業「素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信」報告サイトの PDF 版として作成されました。報告サイトと併せてこれまでの取組事例、平成 20 年度の活動を報告してゆきます。

女子美術大学 平成 20 年度教育 GP 採択事業

「素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信」報告サイト

URL:<http://www.joshibi.net/brand/>

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

取組の概要

<http://www.joshibi.net/brand>


§ 取組の概要

女子美術大学は、美術による女性の自立を大学の理念とすることから、これを海外に適用し、開発途上国の特に女性達への生活自立支援活動を行っています。まだ緒に就いたばかりではありますが、デザインを提供する活動を継続することで、国際力を身に付けた社会貢献できる人材の育成を本取組の目的としています。

〈本取組の背景〉

1. 素材と環境を巡る社会的ニーズ…アート&デザインへの要請
大量生産・消費・廃棄等により地球規模の問題が発生し、環境や人類の福祉、幸福を損なう事態に至ると同時に各種資源や食料を海外に依存することが我が国にとって大きな問題となっています。開発途上国を含め世界全体で「地球環境との共存」を図り、持続的社会的発展を実現するためには、アートとデザインの独創力・展開力が必要です。困難な課題解決に向け幅広い知識の創出と蓄積、英知が必要であり、アートが内在する豊かな可能性と本学の学生達の女性としての感性とその柔軟な力が役立ちます。

2. 本学の人材養成目標…人材養成と協働連携

本学はデザインやアートの分野で、地球レベルでの社会文化と環境の様々な問題に対処できる人材の養成を目的に実践型素材・環境教育を行っています。本プログラムで、学生は地域性に基づいた土・砂・岩・植物などの素材をモデルに、自然環境の機能を理解し、各国とのデザイン交流を通して国際感覚を身に付けます。さらに、本取組は相模原・町田市域を、地球環境問題と結びつけたアート&デザインの素材と環境活動のフィールド実習現場として活用し、土壌や植物生態系の

概念、農（植物）の栽培を大学近隣農場で体験させると共に、NPO 組織、自治体等との地域連携、国際交流協定校との協働体制も取るシステムです。

〈本取組の基幹構造〉

1. 本取組の目的

美術大学という立場から、開発途上国に贈ることができるもののひとつにデザインがあります。日本のデザインは我が国の文化の象徴とも言え、国際的競争力をもつ知的財産として、その贈与は日本ブランド力の発信となりえます。本学の学生達のデザイン力が、開発途上国の地域活性化、産業経済振興への活力となり、継続的な支援を展開することで、広く各国・各地域社会へ貢献したいと考えています。

2. 素材と環境

本学では、20 年以上にわたり自然環境を中心に日本画の絵具（顔料）素材の探求を核に紙・布・繊維・木材・壁土などの素材教育・学習を継続的に展開してきました。これは、他大学にはない本学の独自性であり、現在も社会的資源として循環可能な、環境に負荷を掛けにくい素材の研究を試行しています。

3. 教育の目的

本学の学生は、美術専門基礎教育の中で素材に触れることにより、環境保全の知識獲得、環境や地域等の問題解決活動の契機を得ています。学生達はこれらの活動の実践により自己のデザインやアートが社会と融合するフィールド展開力、応用力を高め、学びの質を向上させます。さらに、学生や教育・研究等の質は、学生教育を 4 年間の完成教育と見るのでは

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

取組の目的

<http://www.joshibi.net/brand>

なく、学生の生涯を見つめ、卒業した後もキャリア形成の途上にありと捉え、一生を支援し続けることで保証できると考えています。また、本学の高大連携は、高校生に大学教育を提供することで入学者の質を高める入学前教育です。これを中等教育以降の一貫教育体系に包含されるひとつの教育的形態と捉え、入学前教育の実践によって大学教育の質の保証を行っています。

4. 美術大学教育を特長づける教育

アート＆デザインの現場を利用した実践力の強化目的により体験型授業科目（実地研究、ファシリテーション型、コラボレーション型授業等）を導入実施しています。

5. 素材と環境教育プログラム

本学の履修プロセスは、「体験フィールド創出プログラム」というコンセプトに基づき、学科専攻を超えた、アート＆デザインの《実践的フィールド》の構築を目的として編成されています。平成 18 年度より試行、19 年度よりカリキュラムに位置付ける「コア科目」と共通理論・関連演習科目に加え、各学科専門科目を主体に活動するチーム実践型、グループワーク型のプログラムによって構成されています。

○コア科目…教育課程開発から海外サービス・ラーニング等の形態を取り「環境論」に加え、「素材論」等のコア科目を学科専攻科目から学部共通科目に発展させる予定です。

○実践型プログラム…講義、演習に加え、ワークショップ、コラボレーション、プロジェクト等表現そのものを主軸とする実践型教育を行います。

§ 取組の目的

1. アート＆デザインへのニーズに応える

地球規模の環境破壊が発生し、戦争に起因する飢餓、生活の貧困等が、海外に各種資源や食料を依存する我が国の重要な課題となっています。とりわけ 21 世紀の世界全体で「地球環境との共存」を図り、持続的社会の発展を実現するためには、アートとデザインの力が必要でしょう。国内・国外の地域社会や企業、行政官庁等では様々な解決困難である課題に直面しています。一方では、共生的社会への参画として、また、多様な文化・社会の交流や融合を促進する機能のひとつとして、アート＆デザインへのニーズは高まっています。今日、芸術表現は、社会性の保持を基盤に、共生的社会の中で社会への貢献・福祉という重要な役割を担い始めているのです。

2. 環境人材の養成

環境省は平成 20 年 2 月に「持続可能なアジアに向けた大学における環境人材育成ビジョン」で、環境人材とは「自らの体験、倫理観を基盤として、環境問題について自ら考え、各人の専門性を活かしたキャリア、市民活動等を通じて、持続可能な社会づくりに取組む強い意志を持ち、リーダーシップを発揮して、社会変革を担っていく人材」と定義しています。女子美術大学ではアート＆デザインの専門知識獲得に加え、環境社会への対応力、複雑化した環境問題に対処できる評価力、問題解決力、マネジメント力のある環境人材を養成したいと考えています。これは美術大学特有の手法であり、未来に向けての問題解決型、実践型人材およびアジアを始め海外との異文化コミュニケーションによる言語の習得、異文化への理解、多様な人的ネットワークを築く等の国際力を身に付

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

取組の目標

<http://www.joshibi.net/brand>

けた人材を育成します。

2. 本学の人材養成目標…人材養成と協働連携

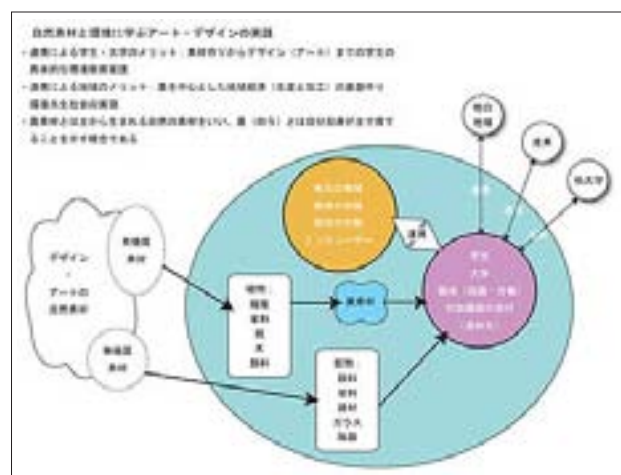
本学はデザインやアート分野で、地球レベルでの社会文化と環境の様々な問題に対処できる人材の養成を目的に実践型素材・環境教育を行っています。本プログラムで、学生は地域性に基いた土・砂・岩・植物などの素材をモデルに、自然環境の機能を理解し、各国とのデザイン交流を通して国際感覚を身に付けます。さらに、本取組は相模原・町田市域を、地球環境問題と結びつけたアート&デザインの素材と環境活動のフィールド実習現場として活用し、土壌や植物生態系の概念や農（植物）の栽培を大学近隣農場で体験させると共に、NPO 組織、自治体等との地域連携、国際交流協定校との協働体制も取るシステムです。

3. 素材と環境教育

本学は素材教育を通して環境教育を捉え、両者の相関性について教育プログラムを開発しました。本プログラムは高大連携の試みとして、理科教育とジョイントします。例えば、顕微鏡を通し美術造形材料を観察、分析し、マイクロレベルの粉体・繊維・高分子から考えると物質構造の連環している様子が身近で明解なものになる等の試行を、本年度は近隣の県立高校 2 校と実施予定です。

§ 取組の目標

モノをつくる学生の情報量は、一般生活者・消費者とは異なり、社会への有意かつ大きな発信力をもちます。そこが一般の大学（直接的にモノをつくらない大学）との差異です。美術大学の使命として環境に取組み、持続可能な社会の構築に向け広い視野をもつ学生教育を行います。例えば、紙漉きのような手仕事の世界では道具を用いて加工し製品に仕上げるために、自然素材の熟知と技術を必要とします。紙や顔料、繊維などからイメージされる素材づくりの伝統や歴史に学ぶことは、アート&デザインにとって大きな意義を持ち、本取組は＜図 1＞の通り、現代的に改良を加え新たな創造的価値を創りだします。第二に、社会的ニーズである環境の基礎知識、情報、農体験等の実践知の獲得となります。第三にアート&デザインの表現力、実践力を創出します。



1. 教育の質の保証

女子美術大学では学生の質や教育・研究等の質は、大学が学生教育を 4 年間の完成教育と見るのではなく、学生の生涯を見つめ、卒業後もキャリア形成の途上にあると捉え、支援

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

取組の目標

<http://www.joshibi.net/brand>

し続ける体制の構築により保証できると考えています。卒業後の生涯をかけた活動を本学は支援しています。そのため平成 21 年 4 月導入を目的に「美大でのキャリア形成支援計画」実施を別途予定しています。本学は現在まで進めてきた素材教育と新たな取組として＜教育ファーム＞での素材育成、素材づくりを実践し、これを＜育てる素材教育＞と呼びます。学生は環境や素材を通じ地域を知り、地域コミュニティのネットワークづくりに参加します。学生が自治体、地域の人々、NPO、企業等と交流し、異なる主体間を繋ぐコーディネートを行うことで、地域のネットワークの拡充と機能が強化されます。学生達のデザインや作品が商品化され、一般消費者の評価を受けることにより、次の素材づくりと作品展開へのフィードバックが行われ、実践知、実践力が身に付きます。また、美術環境における素材育成、素材づくりから作品化し消費するまでの一貫した流れの中で、モノの循環についての知のプロセスと応用力が身に付き、学びに広がりをもつ教育となります。

2. 日本ブランド力の発信

国際競争力の強化には日本を見直す力が必要です。そこに日本の美、日本の隠れた文化としてデザインが登場する出番があります。本学はデザインという日本のブランド力を高めることで世界に貢献し、日本のアイデンティティを高め、海外に発信する力を養成し、発信します。学生自身が、デザインやアートに内在する社会的融合力により自己の拡充フィールドを築いてゆくための素材教育を選択し、美術大学の専門基礎力を培っています。素材（日本画の顔料、紙など）に触れ実物を知ること、素材の制約を前提に活用することによりデザイン力が鍛えられます。素材に触れることで得られる力を

伝えること、教育することが必要です。

3. デザインを通じた国際貢献活動

本プログラムは、＜図 2＞の通り、これまでの本学のアート & デザイン分野の素材を基に、環境教育の実践がもたらしたデザインによる学生主体の国際貢献活動を目的とします。知識伝授型の形式知よりも、持続可能な社会形成に相応しい実践知を重視し、NGO、青年海外協力隊、卒業生や海外の協定大学等との協働連携により国際社会貢献の認識を深めます。かつて古代アジアから我が国に輸入された文化である美術やデザインを日本のブランド開発力でお返しすると共に、学生の国際力向上を目的とする学部・大学院が連動した大学全体でのプログラムです。また、一例として、平成 19 年から NGO を仲介し学生を主体とした海外の開発途上国へデザインを贈る活動が始まっています。いくつかのプロジェクト事例（スリランカ北部等）の極めて限られた範囲ではありますが、学生達が繊維製品、雑貨等に関する商品開発に伴うデザインを提供することで、戦災地域の経済復興、特に女性達への生活自立支援を行う活動を今後とも継続します。



素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

具体的内容

<http://www.joshibi.net/brand>



§ 取組の具体的内容

1. 教育課程、教育方法等

履修プロセスは、「体験フィールド創出プログラム」というコンセプトに基づき、学科専攻を超えたアート&デザインの《実践的フィールド》の構築を目的に編成されます。平成 18 年度より試行、19 年度よりカリキュラム上に位置付ける「コア科目」と共通理論・関連演習科目に加え、各学科専門科目を主軸に活動するチーム実践型、グループワーク型のプログラムによって構成されます。個々のプログラムはその内部に、学生主体で運営されるプロジェクトを複数含みます。本プログラムはプロジェクトの選定、デザイン、運営を多面的にサポートします。

○コア科目…大学での教育課程と融合する柔軟な教育形態や教育課程開発から海外サービス・ラーニングや国内での従来型のサービス・ラーニングの形態をとり、「環境論」の他に「素材論」等をコア科目に加えて学科専攻科目から学部共通科目に発展させる予定です。

○実践型プログラム…講義、演習に加え、次の〈図 3〉の通りワークショップ、コラボレーション、プロジェクト等表現そのものを主軸とする実践型教育を行います。学生達が主体となり取組むプロジェクト活動は、アートドキュメント（実績記録等）により検証されます。



カリキュラムの核であるコア科目の「環境論」は、共通専門科目の位置付けであり、学生はどの学科からも履修できます。座学として実践するのに留まらず、学生たちは自らの発意により独自のプランを携えて地域とのフィールドワークを実践します。教室を飛び出し実社会に交わることで、地域や社会への理解を深めると同時にその課題を知り、解決策提示や作品そのものを一般に公開することにより、自らの成長を確認します。

例えば、本学のファッション造形学科の学生は、今ではほとんど顧みられなくなった植物の苧麻（からむし）を繊維素材に、青苧（あおそ）の糸づくりに取り組んでいます。この活動に取り組む学生の中から「e（人の繋がり境界線としての衣服）」環境プロジェクトが現れました。学生 8 名、教員 1 名、スリランカ人 8 名の参加でしたが、環境論の授業が契機となり、古着で作った何人分もの「繋がった服」を他者と協働して着る体験を実感し、繋がる服は不自由であるけれど、他者との境界線が無くなり心で繋がる可能性を拡大しました。そんなフィールドワークやワークショップの活動を銀座、原宿、本学杉並キャンパスで人々に参加を呼掛けながら実践し、正に結果は、着ること、ころも（衣）、ファッションや環境の本質に迫る実践力の獲得でした。

2. 取組の実施体制…地域等との協働連携

本申請プロジェクトでは、大学が国内外の地域、NGO、NPO、教育機関等と協働連携することが前提となっています。学生達が自主開発するプログラムについて、プロジェクト審査し 1 件につき年間 30 万円～100 万円までを大学が助成します。各学科・専攻が連携してその仕組を教育研究活動の柱に据え、今後 3 年間の実践計画、具体的プランとして推進す

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

評価体制など

<http://www.joshibi.net/brand>

る学内合意を取り、学長の意思に基づき実施体制を構築しています。現在の協働連携は、国内外の大学、研究機関に加え、相模原市、相模原産業創造センター、神奈川県立相模原公園、繊維地場産業（半原町）、建築研究者、農業従事者等であり、今後は農学、生物学等の分野、生物資源研究所（旧農林省蚕糸試験場）、横浜シルク博物館、UNESCO 等の機関を予定しています。UNESCO との協働としては、平成 19 年に「ジョシビの無形文化遺産プロジェクト」を実施しました。詳細は無形文化遺産プロジェクトサイトをご覧ください。

3. 取組の独創性又は新規性

美術教育の現場で農（のう：自ら土に触れ、自らの手で育てることを意味します。）は忘れられた概念ですが、農の重要性を認識し、食育の現場で＜教育ファーム＞を必要とするように、美術の中で＜育てる素材教育＞の展開を本学では計画し実践します。現在まで継続してきた自然素材教育に、＜美術の中での教育ファーム＞ということを新たな軸として加えて提唱します。本学の考える素材作り教育の方向性はふたつあり、ひとつは「農」の素材教育であり、もうひとつは「自然素材（岩、砂、土を含む）」に手を加えて、新たな命を与える過程をもつ「つくる」素材教育です。本学の＜素材と環境プロジェクト＞は相模原キャンパスを中心に、相模原市内、相模川・境川流域の全域をフィールドワークの対象として活動します。学生はフィールドワークを通して地域の気候風土を知りその変化を受容し、風土に適合した素材発見、素材づくりから作品化までの一貫性の中で、モノへの循環を地域の人々と共に学び共有化します。

例えば、地元地域の農家や繊維関係の職人の人々と繋がり、紙を漉くために楮（こうぞ）・三桠（みつまた）・竹・雁皮（が

んび）等、紙の原材料の自生地等を知ることや、新たな取組である教育ファームでの＜育てる素材＞を目的に土壌調査、土壌改良等の知識・ノウハウを得て、原材料に工夫を加える技術の伝承を受けます。地域や他大学との連携により異分野の発想が取り込まれることで、制作活動が活性化して作品の独創性をも生み出します。そして、学生自らが良い素材をつくり出すことで、より独創的な作品づくりに繋がる新規性を帯びた取組です。

財団法人建築環境・省エネルギー機構（旧（財）住宅・建築省エネルギー機構）の分類にある、地球温暖化防止など‘Low impact’の取組が多い中、本取組は‘Low impact’（地産地消など）を含む‘High contact’（人が自然に身近に接する）で、‘Healthy & Amenity’（土に触れ太陽の下で心地よい健康を維持する）であることが特徴です。

§ 評価体制など

本取組の教育効果の測定上、次の 4 点において適切かつ有効な評価を行うと共に、＜図 4＞のように教育目標をより効果的に達成する継続的な活動を行います。

1. 学生の自己評価

正課開設科目と同様に「学生プログラム評価アンケート」を実施し、継続して定量的計測を実施します。また、アンケートの自由記述欄やレポートにより定性的に分析します。

2. 教職員の自己評価

学生プロジェクトチーム担当教員は、上記の評価結果を踏まえ、教育判断の適切性を検証するため、ファカルティ・ディベロップメントの一環として、チーム教員が公開授業を行い、

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

実施計画の概要

<http://www.joshibi.net/brand>

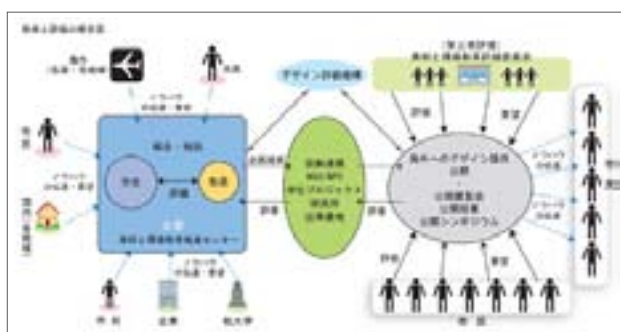
全学教職員の評価を得て次期取組に反映し改善します。

3. 第三者評価

本取組は大学と国内外の地域社会との共生を目指すものであり、第三者評価（素材と環境教育評価委員会）にはプロジェクトの参加者や連携した行政機関、外部団体、NPO、サークル等に加え、国内外から招請する地域の人々が必須です。学生はこの評価を受けて次期プロジェクトのテーマを展開し、活動を Web により公開し社会と共有化します。

4. デザイン評価機構

素材と環境プロジェクト全体の総括をする意味で、上記 3 点の評価結果を踏まえ、国内外へデザインを提供し、海外や NGO 等の外部からデザインの評価を受取ります。また、本学では取組終了後にも財政措置を行い、さらに「デザイン評価機構」を本取組プロジェクト中心に構築および提供デザインの改善・評価を実践します。各国文化を調査、次のプラン改善へと継続し、マネジメント (PDCA) サイクルによりスパイラルアップします。



§ 実施計画の概要

1. 取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画

取組への参加予定数（教員 40・職員 18・学生 800 人）/ 年間

→ 具体的取組の実施計画（表 1）

→ スケジュールの一例（図 5）

2. 実施体制等の具体的な展開

デザイン提供を含む国際貢献プロジェクトは本プログラムの成長と共に育って行きます。女子美術大学では学生の課外等ボランティア活動も含め、学生自身が実践するソーシャルワークを《ボランティア・社会貢献支援制度》として助成し教職員も共に活動してゆきます。

→ 本プログラムの主体となるこれまでの学生の素材、環境プロジェクト活動実績は「これまでのプログラム」を参照ください。

3. 取組期間終了後の大学等における取組の展開予定（財政的措置を含む）

本取組は学長のマネジメント体制の下に実施され、本学が計画進捗に伴い財政的措置を講じ、国内外・各地との協働連携体制を継続します。また、デザインの提供と共に、各国地域の文化とデザインの実地調査し、本取組のマネジメント (PDCA) サイクルを循環させます。

4. 取組期間終了後の展開予定（財政的措置を含む）

期間終了後も学長のマネジメント体制のもとに計画進捗に伴い財政的措置を講じ、国内外・各地との協働連携体制を継続します。デザインの提供と共に、各国地域の文化とデザインの実地調査し、マネジメント (PDCA) サイクルを循環させてゆきます。

* それぞれ展開の詳細は、次ページの表、図を参照ください。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

実施計画（表 1）

<http://www.joshibi.net/brand>

	組織/施設	取組内容	備考
平成 19 年度 以前	・地域貢献の形態をより強化したのは、平成13年9月12日付相模原市との文化促進協定締結による女子美アートミュージアムを中心とする芸術文化交流であった。 ・更に強化したのが、平成14年4月16日付「ヒューマンデザイン開発支援事業に関する基本協定書」（女子美術大学と株式会社さがみはら産業創造センター）に基づく、各種事業の新商品・新サービスの開発支援事業であり、相模原キャンパスを中心に実施中の取組である。 ・本学と株式会社さがみはら産業創造センターとの連携は過去に数多くの実績がある。	・平成15年2月12日(水)_23日(日)『日本の紙一滴き手と使い手の仲間たち展』を実施。自然素材としての紙、本学の畑から収穫した楮・三桠の靱皮繊維を原料とした和紙、及び日本の伝統的な紙として料紙・唐紙・障子紙・書画用和紙などの成り立ち、並びに伝統的紙の後加工技術の過程を一冊のカタログに纏め本学独自の取組を発表している。 ・平成16年12月8日(水)_14日（火）本学美術館での『バラで出来た「もの」たち展』の実施。アート・デザインの立場から自然素材であるバラの色素、粉体を使用し、バラの絵具製作、バラの匂いのする衣服製作、バラの壁土を使った家のワークショップ等の実践を行っている。 ・平成18年より「素材と環境教育プログラム」を試行、19年よりカリキュラム上に位置付ける。 ・平成19年8月「スリランカの象」NGOのTECH JAPANの仲介によりスリランカ北部へのデザインの提供を始める。	・「旧文部省：私立大学等経常費補助金-高等教育研究改革推進経費-特色ある教育研究」で平成8年以降6年間採択され続けた「材料素材から考える造形教育」「天然顔料・畑から考える紙素材」への取組を実施した。 ・第三者評価委員会（素材と環境教育評価委員会）設置準備…平成19年11月上旬
平成 20 年度	・相模原市A&A(新磯野・麻溝台地区)産業（農地を含む）と宅地の混合ゾーン計画スタート（赤沼・横山） ・灌漑施設（環境共生のための歴史遺産復興） ・相模原市生涯学習センターとの協働：地域人材の活用・人材育成実施（小倉・赤沼・横山） ・地域協働ネットワークの準備会設置（坂田・赤沼）	＜教育ファーム 基盤整備・基礎調査＞ ・海外NGOの仲介によりインドネシアの現地で、商品開発支援を予定（7月・8月） ・本学キャンパス及び・相模原市A&Aファーム住宅ゾーンによる農素材（有機素材）系の利用に関する協創教育の実践、地域広報活動の取組、協働組織の調査、相模原市に関する地域固有資源の調査（養蚕、祭り、史跡復活等） ・土壌・気象調査、・栽培実験（平成20年4月中旬） ・公開授業（4月中旬以降、随時開催） ・地域のフィールドワーク、問題解決ワークショップに取組む学生プロジェクトへの助成 ＜学生の自主プログラム＞をWebで情報発信 ・全国大学生環境活動コンテスト（エココン）参加（平成20年12月下旬）	・初年度は調査に多大な時間を要する。 ・第三者評価委員会（素材と環境教育評価委員会）設置…平成20年9月下旬 ・海外でのフィールドワーク（11月上旬） ・デザイン評価機構の設立（12月上旬）
平成 21 年度	- 上記の継続 ・大学キャンパスでの「バラの花びら」展開催（美術館共催）（坂田） ・相模川流域自然素材フィールドワークプラン（橋本・馬場・吉田）実施 ・地域協働ネットワークの組織結成（坂田・赤沼）	＜提案・発信＞ ・『第2回 バラで出来た「もの」たち展』（4月上旬～5月中旬）開催、図録作成 ・相模原ダチョウの卵プロジェクト ・無機素材系調査活動(平成21年4月) ・地域コミュニケーションWebの作成、情報発信（平成21年9月上旬） ・地域人材育成講座（平成21年11月上旬） ・全国大学生環境活動コンテスト（エココン）参加（平成21年12月下旬） ・地域のフィールドワーク、問題解決ワークショップ	・同窓会との協働により全国に素材づくり教育の普及（4月下旬） ・海外でのフィールドワーク（11月上旬） ・海外からの評価者招請（12月上旬）
平成 22 年度	- 上記の継続 ・半原地区繊維素材企業：自然素材利用計画（原田・小倉） ・『自然素材でできた「もの」展』開催	＜活動実践・教育の普及＞ ・展覧会開催（平成22年11月下旬～12月中旬）、図録作成 ・公開シンポジウム開催（12月上旬） ・全国大学生環境活動コンテスト（エココン）参加（平成22年12月下旬） ・学生NPO法人による作品・素材の販売開始 ・本取組報告書作成・刊行（平成22年3月上旬）予定 ・地域のフィールドワーク、問題解決ワークショップ	・アート・ドキュメンテーション委員会（展覧会部会、報告集制作部会設置）7月上旬 ・海外でのフィールドワーク（11月上旬） ・海外からの評価者招請（12月上旬）
平成 23 年度 以降	- 上記の継続 ・新有機素材の開発 ・環境ISO取得に向けて活動	＜活動定着・教育の協働＞ ・全国大学生環境活動コンテスト（エココン）参加（平成23年12月下旬） ・新植物への取組・挑戦 ・NPO法人による作品・素材の販売継続 ・他大学と教育手法に関する共同シンポジウム開催 ・地域のフィールドワーク、問題解決ワークショップ	

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

資料：「素材と環境教育プログラム」関係一覧（表 2）・「環境・素材プロジェクト」チーム一覧（表 3）

<http://www.joshibi.net/brand>

表 2『素材と環境教育プログラム』関係一覧

平成 19 年度授業（ ）は学生人数

コア科目	芸術学部 共通専門科目	環境論（180 名） サービス・ラーニング（34 名）
	必修 必修選択 選択	卒業制作（ファッション造形学科）（66 名） プロジェクト&コラボレーション実習（メディアアート学科）（139 名） エコロジカル・プランニング演習（デザイン学科）（23 名）
関連科目	芸術学部 デザイン学科	デザイン基礎実習Ⅰ（168 名） バリアフリー演習（23 名）
	芸術学部 ファッション造形学科	〈藍・ゆかた〉デザイン計画（64 名） 〈藍・ゆかた〉デザイン基礎造形Ⅰ、Ⅱ（59 名） 〈原系〉ファッション造形ⅠA、ⅠB（56 名） 〈着生（ちゃくせい）〉ファッション造形ⅡA、ⅡB（56 名） 〈素材・身体・環境〉ファッション造形ⅢA、ⅢB（63 名） 〈ウール〉素材演習（34 名）
		総合演習〈紙：馬場・広瀬、顔料：橋本〉（40 名） 素材研究（41 名） 素材実験（26 名） 絵画表現演習〈モザイク、フレスコ、立ち木から立体〉（79 名）
		総合演習〈紙：馬場・広瀬、顔料：橋本〉（40 名） 素材研究（41 名） 日本画ゼミ（21 名）
		ワークショップ研究（44 名） 造形芸術（51 名） アートコミュニケーション概論（50 名）

表 3『素材と環境プロジェクト』チーム一覧

平成 16 年度～19 年度プロジェクト（ ）は参加人数

環境・素材プロジェクト における取扱事例 (相模原地域中心)	卒業制作系	〈藍・ゆかた〉プロジェクト（学生 59 名、教員 3 名） オリジナル紙漉プロジェクト（学生 16 名、教員 5 名）
	理論系	ラフォーレコ・ワークショップ（ラフォーレ原宿）（学生 60 名、教員 1 名） 風呂敷プロジェクト（学生 9 名、教員 1 名）
		ゴミゼロプロジェクト（学生 7 名、教員 1 名） ドッグルの開発（原田ゼミの学生プロジェクト）（学生 1 名、教員 2 名） I LOVE はんばらプロジェクト（半原）（学生 63 名、教員 5 名） 空間創造ワークショップ（学生 160 名、教員 1 名）
	実習・学外実習系	Green Map Project 相模大野（学生 38 名、教員 1 名） ダチョウの卵プロジェクト 2006-2007（学生 6 名、教職員 2 名） アンギンワークショップ（越後十日町）（学生 15 名、教員 3 名） バラ壁のワークショップ（計 4 回）（学生 268 名、教員 12 名） アニメプロジェクト（羽太ゼミ）（学生 12 名、教職員 2 名） 半原繊維産業プロジェクト（学生 18 名、教員 4 名） ブータン顔料プロジェクト（学生 5 名、教職員 2 名） はっぱの博物館（学生 12 名、教員 3 名） Media Museum の運営プロジェクト（学生 5 名、教員 1 名）
		バラの顔料・染料プロジェクト（学生 5 名、教員 1 名） 大地の芸術祭（学生 50 名、教職員 8 名） 十日町プロジェクト（越後十日町）（学生 240 名、教員 25 名）
	公募型プロジェクト系	

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

資料：「学生プロジェクト活動などの実績」（表 4）

<http://www.joshibi.net/brand>

表 4 学生プロジェクト活動などの実績

ただし、平成 14 年度～19 年度プロジェクトに限定

エコレンジャー	平成 14 年 7 月	代々木公園・杉並区	学生 7 名、教員 1 名、農業従事者 2 名
全国大学生環境活動コンテスト	平成 15 年～毎年	指定による	学生のチームが毎年複数参加
森の学校	平成 15 年～05 年	木曽・奈良井宿 軽井沢	一般公募 20 名、教員 2 名 一般公募 20 名、教員 2 名
バラ展 壁作り	平成 16 年 12 月	本学相模原	学生 10 名、小中学生・一般 67 名、教職員 3 名
学生環境フォーラム Encounter	平成 16 年	法政大学（市ヶ谷）	学生 50 名、教員 2 名、卒業生 2 名
つちかべ（土壁）in 川口	平成 16 年	川口市	学生 12 名、小中校生 48 名
日本画・顔料ワークショップ	平成 17 年	鳥根県浜田市	教員 1 名、小中学生、一般 60 名
土間たたき隊（学園祭・三和土作りの実演と発表）	平成 17 年 10 月	本学相模原	学生 5 名、教員 1 名
素敵なリメイクグッズ（保育園訪問 5 回）	平成 17 年	杉並区立和田保育園	学生 3 名、園児 50 名
e 人の繋がり境界線としての衣服	平成 17 年	銀座・原宿・本学杉並	学生 8 名、教員 1 名、スリランカ人 8 名
リサイクル・デザイン隊	平成 17 年	日野市	学生 3 名、NPO 法人 2 名
イチゴ屋根ワークショップ	平成 17 年	横浜市泉区	学生 10 名、農業従事者 2 名、一般 3 名
つちかべ（土壁）in 久我原	平成 17 年	大田区	学生 30 名、小中学生・一般 20 名
つちかべ（土壁）in 伊豆	平成 17 年	伊豆高原	学生 2 名
つちかべ（土壁）in 横浜	平成 17 年	横浜市泉区	学生 12 名
デザイナーズ・ウィーク in 京都	平成 17 年	京都市・東寺	学生 20 名
デザイナーズ・ウィーク in 青山	平成 17 年～18 年	港区	学生 20 名
グリーンマップ（東高円寺駅前商店街）	平成 18 年	杉並区	学生 19 名、教職員 7 名、卒業生 2 名、小学生 23 名、一般 4 名
日本手拭い B 反プロジェクト	平成 18 年～19 年	本学相模原・銀座	学生 29 名、教員 4 名
リメイク・マイバック	平成 18 年	杉並区	学生 7 名、教員 2 名、小学生・一般 30 名
小学生親子マイバック・プロジェクト	平成 18 年	杉並区	学生 6 名、教員 2 名、小学生親子 80 名、一般 20 名
原糸プロジェクト	平成 18 年	本学相模原	学生 62 名、教員 7 名
着生（ちゃくせい）プロジェクト	平成 18 年	本学相模原	学生 63 名、教員 15 名
素材・身体・環境プロジェクト	平成 18 年	本学相模原	学生 63 名、教員 17 名
ウール素材プロジェクト	平成 18 年	本学相模原	学生 62 名、教員 15 名
参加のべ学生 503 名、卒業生 4 名、教職員 82 名、園児～中学生・一般 459 名 計 1048 名			

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

平成 20 年度プログラム活動報告

<http://www.joshibi.net/brand>



これまでの取組から継続、発展してきたプロジェクトも含めて、平成 20 年度に活動のあったプロジェクトを紹介します。

- A. 紙プロジェクト
- B. 絵具（顔料）プロジェクト
- C. バラ・プロジェクト
- D. 素材ミュープロジェクト
- E. デザインミュープロジェクト
- F. 注染プロジェクト
- G. オーストリッチーズ
- H. 素材環境教育プロジェクト
- I. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション
- J. 相武台新磯高校合併 SI プロジェクト
- K. 環境マッププロジェクト
- L. 気候変動プロジェクト

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

A_ 紙プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中

参加学生：絵画学科洋画専攻版画コース・絵画コース・デザイン学科

担当教員：絵画学科洋画専攻 馬場章

場所：本学相模原キャンパス・紙漉場、北側畑、相模原地域

「紙のプロジェクト」は「紙漉き」を通し、紙について学習することを目的に、「紙の歴史」「身近な植物繊維から紙を作る」「紙を使ったデザイン」「紙漉きに関する指導法」の項目からなっています。

■成果

平成 20 年度は、紙の素材に関する調査および、身近な植物から紙を作る方法の実験を行いました。

現在、これまでの紙素材研究と開発の試みによって大学内において美術に使う紙漉きの技術的問題は解決しています。この紙漉き技術を地域密着型のプロジェクトとして成立させる為には、地域における紙の素材となる原材料の調査が必要となってきました。

例えば、厄介者の竹を紙の原料とするには、現在の紙原料として一般的な楮・三桠を原料に加工する方法を改良しなければなりません。同様にススキ・桑・梶の木・蔦・紫蘇・青蘇・その他の麻類など自然に原生する植物も全てが紙になりますが、実験を交え各種植物の紙原料化をシステム化する事が必要となります。その他に廃棄されるダンボールや古着（綿製品）も紙原料になります。

大学の所在する相模原地域で素材マップを造り、地域に自生する植物や廃棄処分であるダンボールの紙原料化について、小・中学校または P.T.A や地域の協力を得て調査を行い、試験紙を製作し、その用途のアイデアを募りました。



稲わらのカット



おくらをソーダ灰液で柔らかく煮る



生活廃材・段ボールを漉いた紙を脱水する

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

A_ 紙プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

■様々な植物から紙をつくる

作物の廃材としては、「トウモロコシ」「稲わら」「オクラ」「サツマイモのつる」その他の植物としては「ススキ」「竹（孟宗竹）」「三桠」「梶の木（楮科）」、そして生活廃材の「段ボール」「綿ボロ」を原材料としました。また、三桠は、相模原校地北側の畑から 3 年目の木 100 本程度を選別し切り取って使用しています。

集まった原料の前加工からアルカリでの煮熟、機械を用いた叩解によるパルプ化、主に溜め漉きでの試験紙作りまでを行い、工程をまとめたテキストを作成しました。繊維をほぐす前段階の処理がそれぞれの材料の特質によって異なり、試行錯誤が必要です。

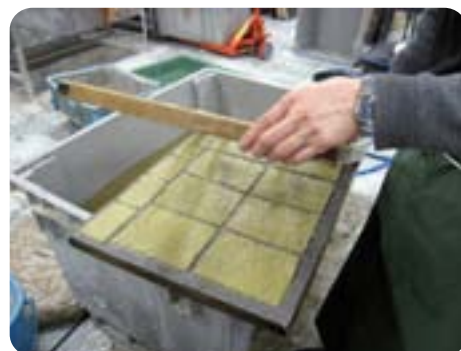
漉きあがった資料と紙原料については、宍倉佐敏先生より繊維化の改良およびサンプルと繊維データの作り方の指導を受け、今後のプロジェクト活動につなげてゆく予定です。20 年度は、漉いた紙から封筒、照明スタンドを試作しました。

■今後（21 年度）について

地域で取れた素材を紙パルプ化し、その地域ごとに紙にする活動、誰でも簡易に漉ける技術・道具を開発してゆきます。参加校（小学校・中学校）を相模原市教育委員会のご協力のもと募集し、応募のあった学校で「紙漉き体験」教室を実施し、本学学生が児童・生徒たちに紙漉きを指導する予定です。女子美術大学附属中学校でも、体験学習として紙漉きを行う予定です。身近な植物を持ち寄り、紙の原料に加工し、その原料から紙を漉く。また、紙の用途について考え、その目的に合った紙を漉く予定です。学生は、参加した児童・生徒たちから体験を通じた意見を取材してゆきます。



とうきびの原料を水に分散させる



漉き枠をはずし、乾燥させると紙になる



コットン、段ボール、楮、トウモロコシ、稲わらの紙



ランプシェードなどへの展開

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 2 年 4 月～継続中

参加学生：絵画学科

担当教員：絵画学科日本画専攻 橋本信

場所：本学相模原キャンパス、その他相模原地域、板橋区など

■プロジェクトの概要

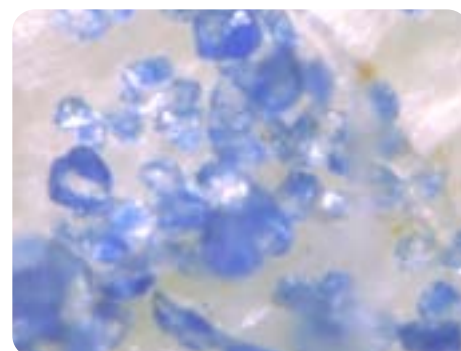
本プロジェクトは、本学の顔料についての研究を、環境というキーワードで整理発展させながら、それらを使った学生の実作活動や、使用した学生によるワークショップ・展覧会につなげて行くことを目標としています。学生の環境問題に関する意識の向上・問題解決力・実践力を、本年度は専門科目中心に試行しました。

■成果

1. 素材実験の実施

本学、橋本信（弘安）と非常勤教員の尾藤衛己先生それぞれの 20 年来の研究の中からの生まれていたアイデアをもとに、学生の実作とワークショップ等で使用していただける分量の絵具と、学生たちが自ら作っている方法・工程の基本を作り出しました。

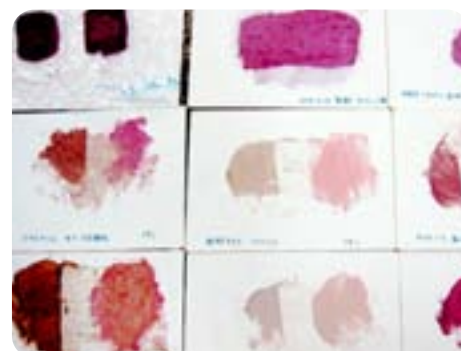
- 造粒による顔料粒子の製造：環境に負荷の少ないよう選定した色材：本学の既存設備、レンタル造粒機を使い、学生の実作とワークショップ等で使用していただける分量の顔料製造システムを構築。参加学生は実践しています。
- 造粒による方法で微粉の油絵用顔料を製造：造粒によっては、油絵で利用する場合に濡れ色となる為、色材の隠ぺい力が弱くなります。それを橋本と尾藤の研究から作り出し利用しています。
- 色素の結晶で考える方法：色素の結晶で考える方法も微量の実験から少しずつスケールアップし、このプロジェクトでも使えるように整備しています。



造粒による岩絵具の製造



微粉の油絵用顔料の製造



顔料についての研究

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

以上の実験の中から「造粒による岩絵具の製造」＜a＞のアイデアは、よりスケールアップされ、専門メーカーが製造することになり、板橋区内小学校での「日本の伝統文化を伝える日本画教育」のために画材の一部として使われました。

2. 問題解決ワークショップに取組む学生プロジェクト活動展開実施

a. 「はじめての日本画ワークショップ」のための顔料試作と説明会を開催しました。（のべ 15 名参加）

b. 日本画専攻学部 4 年、大学院 2 年生を対象に特別授業を行いました。（のべ 30 名参加）

担当教員により、今回開発した環境に配慮された、従来のものよりもより使いやすい日本画岩絵具について、顕微鏡を使い従来のものと比較・解説。その後に学生が実験的に 30 色で合計 3 k g 程度を製造しました。特別授業では、学生は自分たちの使う絵具のことで環境問題との関係（特に、鉛・重金属のこと）について考えると共に、新しい絵具を従来品と比較しつつ使用しています。

* 特別授業で実験製造した岩絵具を使った学生のアンケートから

----- 今回の絵の具は、絵の具の乗りもよく使いやすかった。環境負荷の少ないものなら尚更よいと考えて作業を進めた。今回の使用絵の具を今後も役立てていきたい。

----- 混ぜる時少し浮いたが鮮明な色が得難い感触であった。

----- 今後、水質汚染等ますます問題となると思うので少しでも環境負荷の少ない絵の具を使う事がよい方向に向かうと思い、今後も使う計画である。

----- 塗る時、従来の岩絵具より重たい感じがであったが扱いやすく良いと思えた。下水などに流す問題も家庭で制作する際、処理しやすく従来の絵の具に比較してもよいと思うので、機会があれば使いたい。

----- 費用が従来の岩絵具より安ければかなり普及するのではないと思う。これまで排水はバケツに集め沈殿させてから処理したが、環境負荷のすくないこの絵の具は良いと思った。普及すれば、使用してゆくと思う。

3. まとめ

プロジェクトに参加した学生からも、環境問題を考慮した良い岩絵具であることを体験し、「制作と環境問題」について考えると共に、今後も様々な場面で利用したいという感想が多く寄せられました。今回、体験した学生は「素材」「環境」についての意識がより向上しました。



顔料についての実験



顔料についての実験



実験風景



板橋区立美術館でのワークショップ

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

B_ 絵具（顔料）プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

Topics

【板橋区立美術館で行われたワークショップ】3月に板橋区立美術館でワークショップを開催。参加者のみなさんが学生の指導のもとく a > の顔料紹介と石を磨る方法（日本画専攻教授 橋本信く弘安>開発の方法）を使って自然の色を楽しみました。初日 60 名のべ 8 日間の開催。また、素材の説明パネルをレンタルの顕微鏡で製作しました。板橋区立美術館のホームページにもニュースとして紹介されています。

【高大連携】

相模原市立相武台高校との高大連携の試みの中で理科教育との連携として授業を開催しました。

内容：岩絵具の粒子、糊の屈折率の違いと発色、絵具の構造、自然の石・鉱物を絵具にするなど。また、本学の附属高校理科教員とも連携して授業を行っています。



板橋区立美術館ワークショップ・新聞掲載



相武台高校では理科教育との連携。授業を開催

素材と環境教育が促す日本ブランドカの発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

C_バラ・プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 16 年 4 月～継続中

参加学生：絵画学科日本画専攻ほか

担当教員：絵画学科日本画専攻 橋本信ほか

場所：本学相模原キャンパス

担当教員の橋本信の 20 年来のアイデアと研究から出た色素・素材を提供するかたちで平成 16 年からはじまった本プロジェクトは、自然素材であるバラの花びらを中心とした色素、粉体を新しい方法で顔料・染料として利用した作品展というかたちで成果を報告してきました。

平成 20 年度は、21 年度に旧古河庭園内大谷美術館で開催が予定されている「第 2 回バラで出来たものたち展」の準備活動が行われました。

前回は、教員の研究発表でしたが、今回は学生中心に学生作品での企画を進めています。

展示物は、大谷美術館の空間に溶け込める小さな平面作品・立体作品・衣服・造花などで、バラの花びらから染色液を抽出して利用するなどバラを原材料に色材・造形素材を作り出し、一部もしくは全体にそれを使う作品です。

【2 月 16 日「バラで出来たものたち展」のための素材実験】

今回のためにバラの色素の持つ性質から様々な溶剤などの実験を整理し、今後も以下の方法について利用することとしました。

a: グライNDERミルでの粉碎とフィルタープレス（餃子の野菜絞りで代用）でより大量の処理を可能としました。それらを濃縮し、紙および紙粉・布・シルクパウダーに染付け粉体の場合は、利用可能な溶剤で解砕し利用して行くことを実験しました。

b: 小型の炭化装置を使い「ばらの茎」を炭化し墨として利用するための実験を行いました。



会場予定・大谷美術館



グラインダーミルでの粉碎



様々な溶剤とバラ色素の関係の実験

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

D_ 素材ミュープロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 15 年 4 月～継続中

参加学生：ファッション造形学科

担当教員：ファッション造形学科 小倉文子

場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの概要

日本の伝統繊維は、その地域の気候風土の中で影響を受けながら育まれてきました。各地域に伝えられてきた伝統繊維や染色技術に目を向け、その原材料となる植物の栽培から作品を制作することや、羊毛、原毛の毛を刈って、糸やフェルトにして作品制作につなげることを目標にしたプロジェクトです。制作した作品は、日本の伝統繊維への理解と繊維文化を広めることを目的に、学外で発表します。また、習得した技術を基にエコ活動につなげる試みや、新しい衣生活への可能性を探ります。

活動の内容は、大きく分けて「アンギン」「花と草木の染料」「ウール」と 3 つあります。

【アンギン】

苧麻（からむし）などの植物繊維を素材に衣料のために編まれた布で、今から 6000 年前からの技術です。新潟県十日町市に今も伝わるこの技術を、苧麻の植え付け、育成、刈り取りから糸を作り、この技法で編む技術の体験実習を行い、次世代への伝承とコミュニケーション能力を養う機会とします。

【花と草木の染料】

相模原のキャンパス内に藍や小鮎草、黒豆等の植物や野菜を植え、染色から仕立てまでを一貫して経験し、作品制作へとつなげ、発表してゆきます。



相模原校地・学内の藍畑



徳島藍工房・藍瓶



藍染織家アキヤマセイコ氏訪問・藍染め白抜き

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

D_素材ミュープロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

【ウール】

青森や盛岡の地域と連携し、原羊毛から織毛し、糸を紡ぎ、編み、作品を制作します。また、この制作した作品をつなぎ合わせ、美術館や外部の施設で展示してゆきます。

■成果

女子美術大学のキャンパス内で、植物繊維や、染料となる藍や小鮎草などの染色が可能な植物を栽培し、天然素材への染色の試みを始めました。

藍染めについては、学内から取れた染料からグラデーションで色の実験を行うとともに日本の藍工房の中でももっとも色数を多く染め上げる技術を持つ徳島の藍工房に調査研究の目的で視察し、藍の畑や染色工房の理想的な環境について知ることができました。

また、新潟県十日町市や十日町博物館の協力を得て行う、アングインプロジェクトは昨年に引き続き実施するとともに、来年度に向けての準備も行いました。アングインは編みの技法をいい、新潟県に今も自生している苧麻という植物から糸作りを行い、簡易な編み機を使って編む方法です。このアングインプロジェクトの主旨は技術の伝承と地域社会の方々と共同で行う苧麻の刈り取りから糸作りまでの作業です。大学から出て、地域の中で継承されてきた伝統繊維文化を実体験することで、日本の風土の中で培われた暮らしについて理解することができました。

【ミュー】の意味

仏語で mieux（ミューと発音する）と書いて、「より良い」とか「素晴らしい！」と言うような意味がある。英語の better best などと同じような意味である。例えば Le mieux！（ル・ミュー！）でザ・ベスト！のような感じで使う。



藍染織家アキヤマセイコ氏訪問・藍染めの糸



藍染織家アキヤマセイコ氏訪問・藍で染色



新居製藍所・出来上がった藍

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

E_ デザインミュープロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年度～継続中

参加学生：ファッション造形学科

担当教員：ファッション造形学科 原田松野

場所：本学相模原キャンパス

■プロジェクトの概要

女子美発デザインミューは、染料となる植物を栽培し、日本に伝わる染色技術の叡智を理解し、その繊維文化を広め、習得した技術を基に、新しい生活へのデザインの試みと提案を目的としています。

女子美で生まれた素材や素材加工した材料を使って、企業や地域の施設などと共同でデザイン開発を試みることや、ワークショップなどを行いながら社会貢献を行うことを目的としています。

人にやさしく、環境にやさしい製品とはどのようなものなのかを考察し、素材ミューと連携しながら、相模原キャンパスで育てた植物や染料となる素材から試作を行い、デザイン企画を行います。このデザイン企画は、企業や地域の要請に応えることや、共同で開発するなど、外部との連携により活動してゆくプロジェクトです。

■成果

今年度の目標はその繊維製品となる素材の研究、素材と染料の関係を認識するための試作でした。試作の内容は、シルクスクリーンの技法による衣服への染色やマフラー、靴下素材企画などの小物の染色を行い、色、柄、形等のデザインについてサンプル制作と検討を行いました。

【ミュー】の意味

仏語で mieux（ミューと発音する）と書いて、「より良い」とか「素晴らしい！」と言うような意味がある。英語の better best などと同じような意味である。例えば Le mieux！（ル・ミュー！）でザ・ベスト！のような感じで使う。



企画ミーティング



シルクスクリーンで生地にプリント



仕立てたワンピース例・そよ風にゆれる

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

F_ 注染プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 18 年 4 月～継続中

参加学生：工芸学科、ファッション造形学科

担当教員：工芸学科 大澤美樹子

場所：本学相模原キャンパス、その他

■成果

平成 20 年度は、注染の技法を基に、学生のデザインを商品化すると共に、海外の産地の綿などを利用した繊維製品の商品化により途上国の経済振興や生活支援の実現を目標にしています。そのために本学からは注染の技法指導を行い、参加願った企業の方々からは商品開発に関するノウハウを頂戴し、商品化への協力を仰ぐことを目的として打ち合わせを重ねました。また、学生による素材実験も進行中です。

【注染手拭プロジェクト】

日本伝統の染色法である「注染」は、染色に裏表が出来ない唯一の技法であり、量産できる手法として、明治時代から浴衣や手拭の染色に用いられてきました。現在、日本でこの技法を美術教育に取り入れているのは本校だけです。数少なくなった注染の職人、組合、会社の方々と本校学生が一体になって、この日本の伝統文化を守りつつ、従来の注染では不可能とされていた布の素材や柄のデザインに、学生達が取り組み提案してゆきます。インドネシアを中心に素材の調査と開発を行い、注染手拭の新しい展開を行ってゆくプロジェクトです。12 月、インドネシア染織研究家の渡辺万知子氏に、21 年度 4 月訪問予定のインドネシア織工場の情報提供を依頼し、そこで織られている布を注染染色実験用に購入依頼をしました。さらに群馬県伊勢崎市株式会社松原新染工とインドネシア布開発に向けて、布の検討を行いました。



注染手拭プロジェクト・様々な生地



注染手拭プロジェクト・素材実験



注染手拭プロジェクト・素材実験

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

F_ 注染プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

A. 学生による素材実験（第 1 回）

期間：2 月 9 日（月）～ 2 月 23 日

参加学生：工芸学科 3 年全員（手拭 GP に参加） 指導講師 2 名

今回は既に注染を授業で体験している工芸学科染コース 3 年の学生に限って参加を呼びかけた。この実験は、注染では今までに行なわれていない素材（ウール・絹）の初実験である。

- ・インドネシア綿 9 種類の染色実験
- ・インドネシア絹素材（（株）松原新提供素材）3 種の染色実験
- ・ウール素材 2 種の染色実験
- ・素材と建染染料の実験
- ・素材と反応染料の実験
- ・素材と合金染料の実験



注染手拭プロジェクト・縫製

B. 学生による素材実験（第 2 回）

期間：3 月 25 日～ 30 日

参加学生：工芸学科 3 年全員（手拭 PG に参加） 指導講師 2 名

- ・前半の実験結果を基にさらに改善を図る。
 - ・各素材と染料の多色実験
 - ・実験結果とその記録は来年度 4 月～ 6 月までに纏める。
 - ・タオルと綿ニットの実験依頼が業者から来ており、素材提供を受けた。
- この実験は第 3 回として 21 年度 5 月連休中に行う予定である。



素材実験・ウール、絹の注染

【注染 B 反プロジェクト】

注染手拭や浴衣が、僅かな「染ムラと織ムラ」により商品にならずに B 反と呼ばれた在庫となっていることは、この素材の質の良さを考えると、もったいないことです。かつては、肌に良い素材として手拭や浴衣は、最後は乳児のオムツになるまで大事に使われてきました。これは、最後まで役立つ布が、環境に優しいことも意味しています。使う目的が無かった B 反を、新たなものに蘇らせ、布素材の良さが環境に生かされるものは何かをテーマに、学生のアイデアと製品作りをしてゆきます。

平成 19 年 3 月以降、本学の工芸学科とファッション学科有志学生により B 反（染色ムラ・織ムラ）の手拭を素材に、衣類と小物を作り、＜日本手拭 B 反プロジェクト＞として活動しています。

注染組合から B 反品の提供を受け、製品化、手拭浴衣問屋と手拭販売店が



素材実験・工房風景



素材実験・工房風景

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

F_ 注染プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

協力して販売ルートまでを考えてゆきます。今後はさらなるアイデアとデザインを本学の全学生から募集して展開したいと考えています。

【スリランカ第 2 プロジェクト】

NGO と協力するスリランカ北部の女性自立の為のプロジェクトです。近年、女性の自立の為に NGO「裁縫センター」が現地に設置されました。「象のデザイン」に引き続く今回のプロジェクトは、そのセンターの仕事を中心に進めていきます。

「裁縫」を「糸」という素材の観点で捕らえ、「縫う」「刺す（刺繍）」を中心に現地の女性の技術と調達可能な布や糸の素材を調べ、学生のアイデアとデザインを提供していく。その成果を製品化して、スリランカ女性の自立に当てていきます。



素材実験・工房風景



素材実験・工房風景

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

G_ オーストリッチーズ

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 9 月 1 日～継続中

エココン 2008：平成 20 年 1 月 8 日、9 日

参加学生：芸術学部各学科

担当教員：デザイン学科 赤沼國勝

協働連携先：他大学学生、ダチョウ牧場

場所：本学相模原キャンパス、その他

■プロジェクトの概要

本取り組みはダチョウの卵をいかに活かすかテーマに実践的に研究し、実行します。8 月初旬に実施した、特色 GP の補助による活動＜卵の森プロジェクト＞から、さらに拡大した環境活動の展開をテーマにした事業内容をも有しています。卵の森プロジェクトは小学生約 40 名を対象にしたワークショップの実践でした。地域の産業であるダチョウ牧場からゴミとして出されるダチョウの毛や割れた卵の殻をどのように環境に役立てるかをテーマとして、卵の殻で植木鉢を作り、そこに樹木の苗を植え自分で育ててもらい、大きくなって鉢が小さくなったら学校の校庭に植え替え学校を森にするとした企画でした。＜オーストリッチーズ＞ではこの取り組みを含め、大学祭やエココン 2008（全国大学生環境活動コンテスト）、地域の環境活動ワークショップなど様々な活動に参加しています。

そこで、広く大学生や一般の人達を対象にして、この環境活動を知って戴き、今後の活動についての意見を頂戴するといった、環境活動のコミュニケーション及び教育普及力等の強化を目的とするテーマを設定しました。これが教育 GP としての活動の取り組みです。

■成果

エココン 2008 ではこの活動が高く評価されて全国 63 の出場大学の中で 2 位として准グランプリの栄誉を得ました。



スマイルオーストリッチーズ訪問・ダチョウ



ダチョウのおおきなたまご



エココン 2008・1 日目プレゼンテーション

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

G_ オーストリッチーズ

<http://www.joshibi.net/brand>

実践活動とその報告書作成、評価はミーティングでの出席状況を各人提出のレポートの評価に加味して評価いたしました。

----- エココン 200 に参加して（オーストリッチーズ報告から）エココン 2008・環境に関する様々な分野で活躍中の社会人・全国各地から集まった学生・見学者による公開選考を通じ、学生の環境活動を様々な観点から評価、表彰するコンテスト。エココンに参加するのは初めてで、どんな雰囲気かもあまりわからないまま、1 日目のプレゼンテーションを行った。しかし、どの団体も一生懸命で、聞く側も真剣に聞いているのが伝わってきたと思います。全てのプレゼンを見て思ったことは、私達と他大学のプレゼンが違うという点でした。劇の見せ方やパワーポイントで美大の専門性を活かしたと思います。限られた時間で人に多くのことを伝えることは難しいことですが、私たちは言葉で説明すると同時に、美術を活かすことでより効果的に伝えることができていると感じ取りました・・・エココンに出ることで、色々な大学の人と話をする機会がありました。同じ準グランプリの廃棄物バスターズは、理系の得意な部分を活かした活動で、私たちには無い技術で環境に取り組んでいました。しかし、私たちも美大の特性を活かした活動で環境に取り組み、準グランプリを受賞できました。それぞれの大学の特性を活かし協力することで、活動の幅を広げる可能性を感じました。

またエココン後、他の大学から声をかけてもらったり、意見を頂きました。それまで「発信する」ということを、あまりしていなかった様に思うので、これを機に自分たちの活動を社会に伝えていくことも重要だと思い直しました。

■今後（21 年度）について

両プロジェクトを含め、来年度の授業の＜環境論＞＜素材論＞から発展して自主活動を行うであろう数グループの取り組みにたいして、取り組みを実施する学生達のために、サービslラーニングでの単位認定を行いたいと考えています。この活動は来年度に向けて、どのような取り組みを新たに導入していくかなど、包括的に環境問題に挑戦し、発信する企画として現在も活発に活動を継続しています。

オーストリッチーズの活動は公式サイトからご覧いただけます。

<http://www.joshibi.net/f-design/ostriches/>



エココン 2008・公開講評



エココン 2008・公開講評



エココン 2008・2日目朝練



エココン 2008・2日目プレゼンテーション

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 素材環境教育プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年度～継続中

参加学生：約 20 名

担当教員：芸術学科 坂田勝亮

場所：相模原キャンパス 1 号館 5 階を中心に、必要に応じて随所

■本プロジェクトの概要

美術の基盤となる素材と環境との関係を美術作品の制作を通して考えると、言うカリキュラムを児童教育に導入することで、素材と環境の重要性を美術から学ぶ児童教育カリキュラムを構築することを目的としています。

■成果

この目的のため素材と環境とについて学生たちが自ら勉強会を開くとともに、教育ツールとしてのカードゲームを試作しました。

はじめに本カリキュラムの目的を達成するための議論が行われ、教育カリキュラムとしてカードゲームにどのような要素を持ち込む必要があるのか、カードゲームを通してどのような内容を伝えるべきなのか、この目的のためにはどのような構成とルールを持ち、どのようなデザインを必要とするのかについて議論が繰り返されました。

また、これと並行して勉強会を行いました。勉強会では素材と環境との関係を、美術を通して考えてみるために、実際に素材と美術との関わりを体験。絵画学科馬場教授の指導のもと紙漉きの実習を行い、素材と美術作品との関係について、楮（こうぞ）や三桴（みつまた）、木綿の特性とそれによる紙漉きや加工技術の違い、作品に対する応用や用途の差異などについて学習しました。さらにデザイン学科赤沼教授の素材と環境に関する特別講義を開催し、素材が環境と深く関わり合い、私たちの生活と密接な関係があることを学ぶことができました。

これらの成果をもとに、教育ツールとしてのカードゲームの試作を行いま



勉強会・学内に育つ各種自然素材を学ぶ（三桴の花）



紙の原材料になる素材を学ぶ



紙漉きを体験

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

H_ 素材環境教育プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

したが、まずは実際に幾つかのカードゲームや市販のものを再点検し、その長所や短所を洗い出すことから始めました。その結果、既存の教育ツールとしてのカードゲームは市販のものに比べゲーム性が乏しく、子供たちにとっての魅力がより少ないものが多いとの結論に達しました。一方で、市販のものは破壊、戦いといったゲーム性が主たる特徴であり、本プロジェクトの創造、保護、発展的な変化といったコンセプトと合わないことも明らかになりました。このため本プロジェクトでは子供たちにとって魅力的なゲーム性を備えながら、破壊・戦闘ではなく創造・保護といったコンセプトでルールを構築し、デザインコンセプトにも用いることとしました。このルールに基づきデザイン案をお互いに持ち寄り、カードゲームの試作を進めています。

今後、この試作カードゲームは地域の児童たちの協力により発展され、必要な改良が加えられて完成する予定です。



企画ミーティング



背景、意図、目的、ルールや魅力の要素について、議論を繰り返す



企画に沿うデザイン原案の試作



試作カードゲーム

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>


実施期間：平成 20 年 7 月～継続中

参加学生：県立新磯高校の生徒、社会人

担当教員：工芸学科 吉田潤一郎

場所：県立新磯高校陶芸の実習室・釜場

■プロジェクトの概要

県立新磯高校との授業コラボレーションを目的に、平成 20 年は新磯高校陶芸コース授業うち、夏冬に実施する短期集中講座（選択授業）の支援策として、授業活動の進捗指導、講評の指導や方法を提言するところから開始することになりました。高校美術教育と大学専門教育をひとつづきの流れとして捉え、その観点で次年度の活動を発案してゆこうとするものです。現時点では以下の 3 つのポイントからプロジェクトについて考えています。

1. 大学生と高校生の交流
2. 指導内容の相互理解
3. 設備面の検討

1. 大学生と高校生の交流

高校生が大学の現場に接することは、大変重要な経験となっています。大学生との交流の機会を増やすことで、より具体的に自分の進路について考えられるようになってほしい。

2. 指導内容の相互理解

高校での授業は生徒全員が美術を志しているわけではないので、導入の部分でいかに美術に興味を持たせるかの苦労が伴うものでしょう。大学では実習を通年で行い、基礎から応用、発展までを 4 年間にわたって指導しています。助言をする際には、4 年間の指導全体を念頭に時宜に合ったコ



新磯高校・夏の公開講座



夏の公開講座



夏の公開講座

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

コミュニケーションをとるように考えてもいます。

新磯高校への授業参加では、そのような大学の具体的な状況を伝えたいと思います。高校生に高校と大学の違いについての理解を深めてもらい、自分たちが今している勉強がどのように大学と繋がるのかを、改めて考えなおそうと思っています。

3. 設備面の検討

陶芸教育を高校美術教育から大学専門教育への流れとして捉えた時、それぞれの現場でどのような設備が適切であるかを考えてみたい。また、設備面でのトラブルとその対処方法についても検討していきたいと思っています。

■成果

【第 1 回 新磯高校との授業コラボレーション打合せ】

日時：平成 20 年 11 月 6 日（木） 15：30～17：43

場所：相模原・応接室及び本学工芸学科陶芸の実習室・釜場

本学工芸学科陶芸コースを、新磯高校の先生方に見学していただき、本学の授業の実際を理解していただいた。その上で、新磯高校の授業と比較してどのような協力関係が築けるかを話し合った。その結果、本年度はまず新磯高校の冬の集中講座に吉田が参加することになった。

【第 2 回 新磯高校の陶芸集中講座への協力】

日時：平成 20 年 12 月 9 日（火） 13：30～15：30

場所：県立新磯高校陶芸の実習室

新磯高校冬の陶芸集中講座初日に参加。タタラ成形を中心にてびねりを交えた制作を行いました。受講生は各自作りたいものを教員に話し、適するやり方を教わって制作に取り組みました。初心者が多いので段階的に作業を進め、丁寧な指導が行いました。受講生は、なかなか思い通りの形にならない粘土に対し、飽きずに取り組んでおり、全員熱心でありました。社会人の初心者の方々と触れ合い、造形訓練をしていない方がどのように粘土を扱うかを再認識することになりました。

【第 3 回 新磯高校の陶芸集中講座への協力】

日時：平成 21 年 1 月 17 日（土） 10：00～12：00

場所：県立新磯高校の陶芸実習室

新磯高校冬の陶芸集中講座最終日に参加。窯出し実習を行った後、講評会



冬期公開講座・制作指導



冬期公開講座



陶芸部活動状況



陶芸部活動状況

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

I. 新磯高校陶芸コース・コラボレーション

<http://www.joshibi.net/brand>

を行いました。窯出しのときには歓声が上がり、受講生の気持ちが高ぶっていることがよく伝わってきました。初心の感動について、その大切さをあらためて感じさせられました。作品の出来具合については教員一人一人が各受講生と話をし、それぞれの考えを述べてもらい受講生は陶芸の難しさと魅力について各人各様の感想を持っていることがわかりました。最後に川上新磯高校校長からまとめの話があり、集中講座が終了しました。

■今後（21 年度）について

今後の活動内容については、いくつかのアイデアがでています。新磯高校の通年の美術授業への参加（見学だけの参加ではなく、実際の指導に関わる）、女子美生または女子美卒業生による高校生へのレクチャー、高校生の女子美での制作体験や女子美講評授業の見学など。両校の学生（生徒）同士が交流する機会を作りたいという方向で進んでいます。



生徒作品



縄河祭 地域コーラスの方へのお土産

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

J_ 相武台新磯高校合併 SI プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 10 月～継続中

参加学生：メディアアート学科 相武台高校生徒 新磯高校生徒

プロジェクト統括：相武台高等学校 教頭 伊原伸一郎

担当教員：メディアアート学科教授 早瀬和宏

場所：本学相模原キャンパス北側校地、その他相模原地域全般

■プロジェクトの概要

「学校づくりのパートナー募集」というキャッチフレーズのもと、それを現実化することで、生徒の表現力・コミュニケーション力を育成することを基本方針とし、相武台高等学校と新磯高等学校の合併による新高等学校のためのスクールアイデンティティの開発を両校プロジェクト推進メンバーと女子美メディアアート学科教員、および学生参加チーム主導となっ

■プロジェクトが目指す当面の成果物

新校の広報や校内集団活動に利用できる、新高等学校のニックネーム・ロゴタイプ・マスコットキャラクターなどの作成。これらの作成にあたっては、新校のアピールをはかるとともに、新校生徒が帰属感を醸成し集団形成を図れることを目的としています。

■成果

新磯高校にて両校生徒・指導教員および女子美参加メンバーによるミーティングやアンケートの結果を持ち寄り集計と選別を行いそれぞれの項目を決定しました。

【決定事項】

ニックネーム＝SORA（相武台の SO と新磯の RA）



ロゴマーク提案第一回目ミーティング



ロゴマーク提案第一回目ミーティング



ロゴマーク最終案ミーティング

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

J_ 相武台新磯高校合併 SI プロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

キーワード＝輝く・空・青・赤

スローガン候補庵の決定＝ Set Out Radiant Air

日本語の意味＝翔びたて輝く空へ

キーワード・カラー＝青・赤

キャラクター＝つばめ



ツバメシンボルマークと SORA ロゴタイプの決定案

数度にわたる相武台高校、新磯高校のプロジェクト推進メンバーによる打ち合わせ、両校でのアンケートの結果から、ツバメシンボルマークと SORA ロゴタイプが決まりました。またツバメキャラクターの方向性も決定。

■今後（21 年度）について

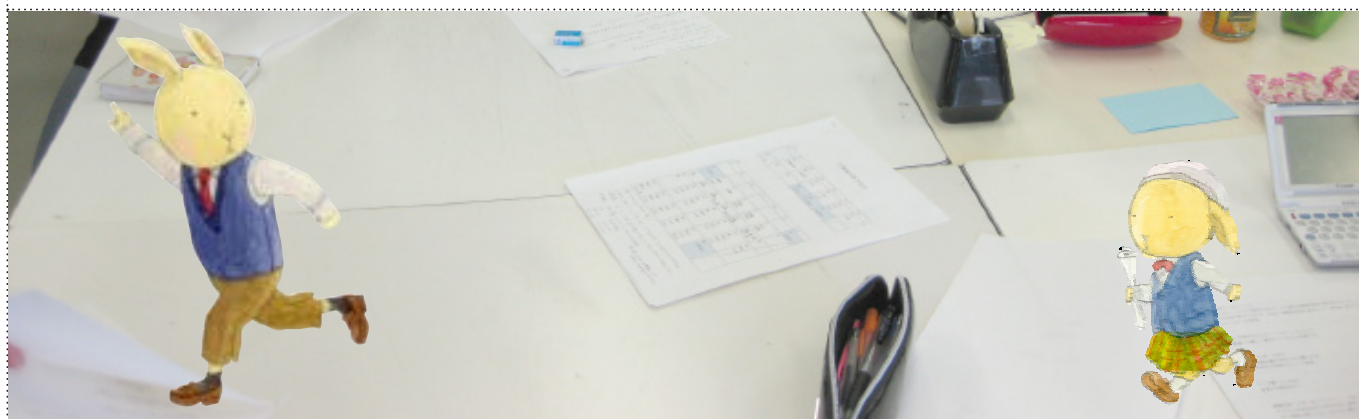
新校の正式校名のロゴタイプの制作。決定したシンボルやロゴタイプの印刷物や様々なツール等への展開および立体物などの提案。キャラクターグッズや SORA の物語をつくってゆく予定です。



キャラクターグッズミーティング風景

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

K_ 環境マッププロジェクト

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 11 月～平成 21 年 3 月

参加学生：芸術学科 2 年生

担当教員：デザイン学科 赤沼國勝 芸術学科 佐藤美智子

場所：大学の相模原キャンパス、その他相模原地域全般

■プロジェクトの概要

本取り組みは教育 GP として今年度が初めての取り組みです。内容は芸術学科のワークショップ研究プランのひとつに女子美生通学路を対象として学生がグリーンマップ手法を使い、その地域の環境を再発見するという授業を行いました。

その後受講生の内有志の学生が授業内容や結果を客観的にとらえ直し再構成して、最終的に印刷物にするという内容で進められてきたものです。

■成果

【女子美術大学学生が通う自転車通学路の環境マッピング】

授業時間内でのマップと全体の報告書作成、評価はミーティングでの出席状況を各人提出のレポートの評価に加味して評価しました。

【グリーンマップ企画書「Dear-From」作成】

授業の中でのグリーンマップ制作にあたり、相模原住民のみなさんに呼びかけ訴えかける内容が多かったため、Dear「相模原住民の皆さんへ」、From「私たちが」というコンセプトを設定し、8つの班のグリーンマップや報告をまとめることになりました。

対象：相模原住民の大人～子供（小学生まで）

アイコンや文字はデジタル、途中に入れる挿絵や地図の下地はアナログとしました。グリーンマップに使用する記号はグローバルアイコンで統一しました。3月末に印刷物として配布されました。（全 25 ページ）

内容：・はじめに・目次・グリーンマップの説明・地域環境の認識について・「地球環境の認識+地図 1」・通学、交通について・「通学、交通+地図 2」・その他+地図 3」・全体のまとめ、考案、クラスや広報班からの感想と先生の言葉



女子美生の自転車通学路・環境マッピング調査



環境マップイラスト制作中



企画ミーティング

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 気候変動プロジェクト：環境ポスター制作 ワークショップ

<http://www.joshibi.net/brand>

実施期間：平成 20 年 12 月～平成 21 年 1 月

参加学生：芸術学部 メディアアート学科 デザイン学科 他 46 名

担当教員：メディアアート学科 川口吾妻 デザイン学科 赤沼國勝

説明会：

相模原校舎 12 月 19 日 参加学生約 50 名

杉並校舎 12 月 18 日 参加学生 1 名

アイディアチェック：赤沼・川口担当

応募前講評会：1 月 23 日

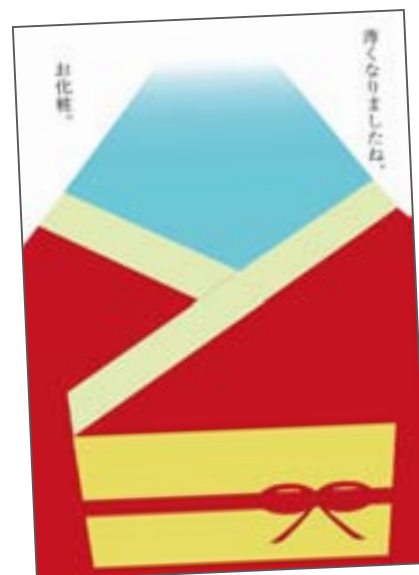
■プロジェクトの概要

直近の世界的な問題として危機が叫ばれている「気候変動」をテーマにポスター制作を学生に呼びかけ、環境意識やポスターによる広告、コミュニケーション技術向上を目指す教育プログラムです。学内に中間指導、講評会を行いました。最終的に 46 点の作品が集まり、IAA（国際広告協会）が主催する「気候変動」国際コンペに応募しました。

■成果

教育プログラムに参加した学生は、地球環境について身近な問題として意識し、世界で起きている「気候変動」の事例を調査することによって、日本人の問題意識や危機感の薄さを知り、日本独自に発信できる解決の取組について学ぶ機会を得ました。

特に、今回は国際コンペに参加するということで、学生は、ポスターとして表現するメッセージを外国の人が見てどのように感じるか、意図したとおりメッセージが伝わるのかについて意識することとなり、日本語で考えたキャッチコピーやコンセプトの翻訳について、さらには日本独自の発想や伝統をいかに表現するかなど、制作段階で国際性や日本の個性を改めて考えるプログラムとなりました。



©Motoko Yoshida



©Kana Yamada

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

L_ 気候変動プロジェクト：環境ポスター制作 ワークショップ

<http://www.joshibi.net/brand>

■今後（21 年度）について

IAA の「気候変動」コンペが行われるかどうか未定ですが、本プロジェクトは環境問題に対する啓発をテーマとして、継続的に活動を行う予定です。

■コンペ詳細

IAA + 電通 + 女子美 世界学生ポスターコンペティション

テーマ 『気候変動』：

気候変動は、目の前の現実となっている。

今回募集を行ったポスターコンペティションは、アート&デザインを学ぶ世界の学生を対象に、喫緊の課題である「気候変動」をテーマとしたポスター制作を呼びかけ、世界に発信することによって、環境意識を高め、アート&デザイン手法による広告表現の技術向上を目指すことを目的としています。

主催：国際広告協会 (International Advertising Association)

協力：国際連合 (The United Nations)

協賛：株式会社 電通



作品募集ポスター

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

これまでのプログラム活動報告

<http://www.joshibi.net/brand>



これまでも、女子美術大学では、教職員が学生をサポートすることで、様々な「素材と環境のプログラム」が活動してきました。これまでの活動の一部をここに紹介します。

1. 紙プロジェクト 平成 2 年 4 月～継続中
2. 絵具（顔料）プロジェクト 平成 2 年 4 月～継続中
3. バラ・プロジェクト 平成 16 年 4 月～継続中
4. アンギン・プロジェクト 平成 15 年 4 月～継続中
5. 日本手拭B反プロジェクト 平成 18 年 4 月～継続中
6. スリランカの象プロジェクト 平成 19 年 7 月～継続中

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

1_ 紙プロジェクト（平成 2 年 4 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>

期間：平成 2 年 4 月～継続中

場所：本学相模原キャンパス北側校地

担当学科：絵画学科洋画専攻（版画）が中心、日本画専攻がサポート

概要：版画創作研究の中で教員、院生が学部生と協働してオリジナルの版画紙の素材開発活動を相模原にて継続してきました。その紙素材研究と開発の試みが、現在の素材と環境教育プログラムの、美術専門基礎教育を強化する展開の礎となっています。この活動について絵画学科日本画専攻 / 洋画専攻版画コースが補助金申請し、旧文部省から平成 8 年度以降 6 年間にわたり「材料素材から考える造形教育」「天然顔料・畑から考える紙素材の研究活動」が採択されました。また、版画コースでは、「紙漉き教育」の実践により文化庁国内研修員を 2004 年、2006 年にわたり受入、和紙と洋紙による版画用紙、和紙原料と洋紙原料の混合による描画用紙の研究を指導しました。

『日本の紙：漉き手と使い手の仲間たち展』

紙に関するシンポジウムと展覧会

期間：平成 15 年 2 月 12 日～ 23 日

場所：女子美アートミュージアム（本学相模原キャンパス）

展覧会概要：自然素材としての紙、本学の畑から収穫した楮・三桠の靱皮（じんぴ）繊維を原料とした和紙、及び日本の伝統的な紙として料紙・唐紙・障子紙・書画用和紙などの成り立ち、並びに伝統的紙の後加工技術の過程を同名の一冊のカタログ（2003 年 2 月 12 日刊行）に纏め、本学独自の取組を発表し、マスコミ等の高い評価を得ました。

メディア掲載：「日本の紙－漉き手と使い手の仲間たち展」日本経済新聞 2003 年 2 月 10 日夕刊、「数千年の生命力「和紙」を守ろう」産経新聞 2003 年 2 月 12 日朝刊 等

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

2_ 絵具（顔料）プロジェクト（平成 2 年 4 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>

期間：平成 2 年 4 月～継続中

場所：本学相模原・杉並キャンパス

担当学科：絵画学科日本画専攻の教員、学生

概要：原材料・素材製造から学生や教員が関わることで、多分野にわたる素材教育が実践できます。例えば、日本画専攻の学生は日本画の絵具である顔料として、相模川流域の自然石などを粉体に加工し、自らの手で素材を作り出しています。本学独自の取組である天然顔料に関する素材研究を目的に、ブータンの王立美術学校の校長：ジグメ・イエツェル氏を研修員として受入（2004 年 11 月）。また中国山西大学の教員が本学に研修で訪れるなど、海外からの研究員受入にも成果を上げ、マスコミからも評価されています。

メディア掲載：「石で描く色の世界・日本画家・橋本信」NHK新日曜美術館 1999 年 10 月 10 日放送、「大理石から東京の土まで」読売新聞 2000 年 5 月 9 日朝刊、「街の様々な分野に応用も」日本経済新聞 2000 年 12 月 2 日朝刊、「仏教美術用岩絵の具 母国の若者に」朝日新聞 2002 年 9 月 28 日朝刊、「天然素材絵の具 鉱石から自作」日本経済新聞 2003 年 1 月 11 日朝刊、「岩絵の具製法、日本にあり --- ブータン画家が来日仏画制作のための画材研究」日本経済新聞 2004 年 11 月 1 日朝刊 等

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

3_ バラ・プロジェクト（平成 16 年 4 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>



期間：平成 16 年 4 月～継続中

場所：本学相模原キャンパス

概要：アート・デザインの立場から自然素材であるバラの花びらを中心とした色素、粉体を新しい方法で顔料・染料として利用した作品の展覧会を開催。出品者は、本学の建築：赤沼國勝、プロダクトデザイン：山本吉男、グラフィックデザイン：伊勢克也、ファッションデザイン：小倉文子、原田松野、絵画：橋本弘安の教員 6 人。「お菓子から服飾、建築まで」多岐にわたり、バラの色素、粉体を使用し、バラの絵具製作、バラの匂いのする衣服製作、バラの壁土を使った家のワークショップ等の実践を行いました。

『バラで出来た「もの」たち展』

バラを素材とした共同研究（3 年間）とその展覧会 そして素材のもつ意味

期間：平成 16 年 12 月 8 日～14 日

場所：女子美アートミュージアム（本学相模原キャンパス）エントランスホール

展覧会概要：素材の持つ意味をアート＆デザインの立場から研究し、学生達や一般の方が参画したワークショップに展開した「バラ展 壁作り」のような発展的プロジェクトの取組も生まれました。素材と環境教育プログラムでは、学生の素材を扱う実体験を通して「素材と環境プロジェクト」の通り、さらに小さな各プロジェクトが生まれ、チーム活動が展開されています。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

4 アンギン・プロジェクト（平成 15 年 4 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>



期間：平成 15 年 4 月～継続中

場所：本学相模原キャンパス、新潟県十日町市

担当学科：ファッション造形学科の教員、学生

概要：学生が、縄文時代から伝わる編布〈アンギン〉について学び普及する体験活動を継続しています。学生が一般市民と共に素材となる、苧麻（からむし）を 4 月に畑に栽培する段階から始まり、8 月に刈取り、青麻（あおそ）の糸製作、アンギン織物製作などを体験するワークショップを実施しています。ファッションの源流と派生を、日本で最も古い着物から学び、普及する意義を実践により経験化する試みとなっています。アンギンは縄文時代からの古代織物で、木綿が普及するまで苧麻や大麻は衣類繊維として使われていました。からむし（苧麻）の茎から剥いだ繊維を通常青苧（あおそ）といい、繊維の色により赤苧（あかそ）・白苧（しろそ）と呼び、茎の外皮下にある軟らかい内皮から取れる繊維を糸にして布に編みます。写真は 2006 年 7 月に学生プロジェクトが、植物由来の衣服の再生、アンギンの衣服（自然素材）のリサイクル等を検討した時のものです。古着のアンギンは紙の材料としても漉き返され紙に生まれ変わります。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

5_ 日本手拭 B 反プロジェクト（平成 18 年 4 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>

期間：平成 18 年 4 月～継続中

場所：本学相模原キャンパス、銀座

担当学科：工芸学科の学生、教員＆ファッション造形学科の学生

概要：学生達が、日本独自の染色法である注染（ちゅうせん）に着目し、B 反という織り傷やスレの反物に注染を施し日本手拭の質感の良さと手触りをアピールした実践的プロジェクトであり、銀座のショッピング街で好評を得ました。社会に対しデザインだけでなく技法も提供可能なことを立証した事例です。注染は明治 40 年頃に大阪で始められた中形（40×95cm）と呼ばれる形（かた）を使う型染の一種で、柄の部分に染料を注ぐことから注ぎ染などとも呼ばれ、「量産が出来る手仕事」として評価される、世界でも類を見ない独特の技術です。浴衣や手拭いを作る際に使用され、布に裏表がなく優しい表情になり、使用するに従い柔らかく布が育つ感じが分かります。本技法を正式に高等教育機関で授業展開するのは本学工芸学科のみです。

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

6_ スリランカの象プロジェクト（平成 19 年 7 月～）

<http://www.joshibi.net/brand>

期間：平成 19 年 7 月～継続中

場所：本学杉並キャンパス

概要：デザインを通じた海外途上国の特に女性の生活自立支援を行います。学生はデザイン提供のみではなく、現地の人々との交流により、国際コミュニケーション力を身に付けると共に、デザインにより国際貢献活動を体験し、人と文化が継続的に交流する実践的フィールドを体験します。スリランカ北部は 1983 年以来現在まで少数派民族タミル人の反政府武装勢力が分離独立を目指し政府側との内戦状態にあります。学生等の安全確保が保証されるまで現地には入れませんが、NGO 等を介して、現地の大学等との連携協働も行い、人と文化が継続的に交流します。具体的に本学では 2007 年より＜スリランカの象＞に取組み、学生達は自分達の手掛けるデザインを提供することで、海外の開発途上国、戦災による経済復興支援、自立型経済支援を実施しています。NGO TECH JAPAN の依頼を受け、戦地での特に女性の経済支援を行うことを目的に、繊維製品、雑貨等の商品開発に伴うデザインを提供する事例となっています。

女子美術大学 | 文部科学省「平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）採択事業

素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信 素材と環境教育を通じた体験フィールド創出プログラム

<http://www.joshibi.net/brand>

平成 20 年度報告サイト PDF 版

2009 年 4 月作成

Copyright 2009 JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN. All Rights Reserved.

女子美術大学 相模原キャンパス：〒 228- 8538 神奈川県相模原市麻溝台 1900 杉並キャンパス：〒 166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
お問い合わせ：教育研究事業部 042-778-6144